

霊能番組への関心と宗教情報リテラシー —第9回学生宗教意識調査の結果を中心に—

井上 順 孝

はじめに

テレビで流される霊能番組に、若者たちはどの程度関心を抱き、またどのような影響をこうむっているのだろうか。あるいはインターネットが流布したことで、広い意味の宗教情報との接点は、どのように増えてきているであろうか。情報化の進行とともに大きな課題となると考えられる宗教情報リテラシーという問題は、宗教研究においても、重要な位置を占めつつあると考えられる。

宗教学のなかでも、宗教社会学や宗教心理学と区分される分野は、このテーマととりわけ深く関わると思われるが、具体的に一定のデータなり観察事実なりに基づいての本格的な研究はこれからという段階である。ここでは、2007年の4月から6月にかけて学生に対して実施した第9回学生宗教意識調査⁽¹⁾の結果を中心に、過去の一連の調査結果も参照しながら、この問題への手がかりを考えてみたい。

「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクトと國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトとの合同により、1995年に学生への宗教意識調査(以下「意識調査」と表記する)が開始された。2005年からは、宗教意識調査プロジェクトと日本文化研究所の総合プロジェクトとの合同になり、2007年度の調査で9回を数える。さらに1999年からは、やや小規模ながらほぼ同じ内容の調査を韓国でも実施、比較を行なっている。2007年度までに4回の日韓比較調査(以下、「日韓比較調査」と表記する)を実施した。毎回基本的質問は同じであるが、それぞれの回の調査に独自の質問も設けられている⁽²⁾。

2007年の調査では宗教文化教育に関わる質問をいくつか設けたが、それとともに、いわゆるテレビの霊能番組等についても質問した。すなわちテレビ朝日系の番組「オーラの泉」に関して3つの質問項目を設けた。また細木数子の占い番組に対する意識や、宗教やサブカルチャー関連のインターネット・サイトの利用度などについても調べた。

霊能番組に関わるような質問は今回が初めてというわけではない。これまでの「意識調査」でも、いわゆる霊能者を登場させるテレビ番組(以下、霊能番組と表現していく)についての質問、またインターネットの利用状況や、その内容についての質問をときおり含めてきた。そこで、まずテレビの霊能番組に関する調査結果から見られる傾向をいくつか指摘し、ついでインターネットの利用の広まりと、どのような宗教・サブカルチャー関連のサイトに関心をもっているかについて触れる。その上で、情報時代の宗教情報リテラシーとの関わりについて言及する。

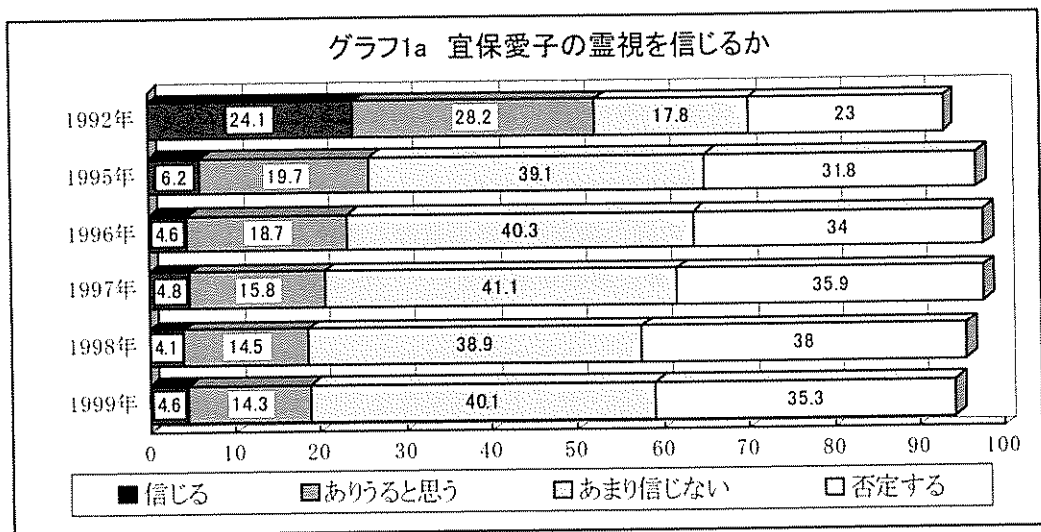
1. テレビの霊能番組

テレビの霊能番組に関しては、1990年代に霊能者としてしばしばテレビに登場した宜

保愛子について何度か質問している。1995年の第1回の「意識調査」に先立って、1992年に國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトが⁽³⁾、宗教教育に関するアンケート調査を実施した。全国の32の大学から4,005名の有効回答が得られた。ここでは宗教系の学校の学生とそうでない学校の学生との間で、宗教に関わる事柄にどのような意識の違いがみられるかを中心的に調べたのであるが、その中に「宜保愛子の靈視」を信じるかどうかの項目が設けてあった。この結果は興味深いもので、過半数の学生が「基本的に信じている」もしくは「信じているわけではないが、ありうることだとは思っている」という肯定的な回答であった。そこで、1995年からの一連の「意識調査」でも同様の質問をし、99年までの5回の調査において、宜保愛子の靈視に関する質問項目を設けた。

第1回の意識調査を開始する直前の1995年3月にオウム真理教による地下鉄サリン事件が起こった。以後しばらくの間テレビ界は明らかに靈能番組を自粛したのであり、この種の番組がかなり少なくなった。番組を自粛するのみならず、靈能者を批判するようなスタイルも増えた。宜保愛子の靈視も否定的な扱いをされる場合が出てきた。靈能番組の様相が旧に復するのは事件後数年たってからである。

それゆえ、宜保愛子の靈視に関する調査は、テレビ局の靈能番組の扱いの変化が、彼女の靈視の信頼度にどう影響をしたかを考える一つのデータを提供する結果となった。これについては、拙著『若者と現代宗教』(ちくま新書、1999)において紹介しておいたが、92年には肯定派が5割を超えたものが、95年以降はしだいに減り、98、99年には2割弱となった。グラフを参考のため掲げておく⁽⁴⁾。(グラフ1a参照)

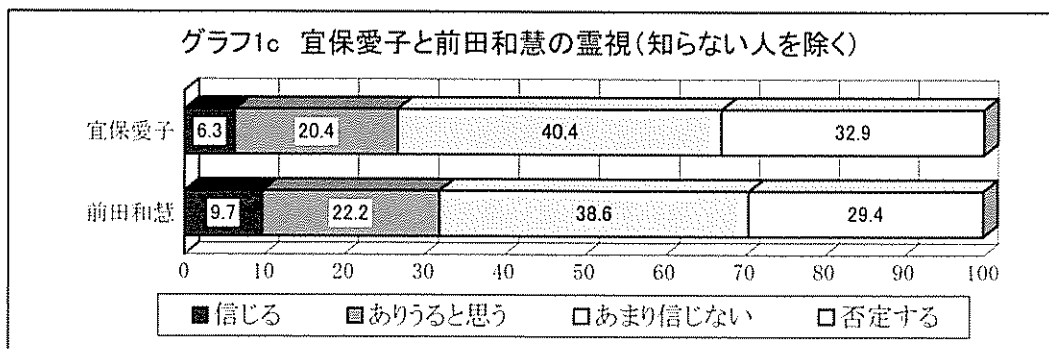
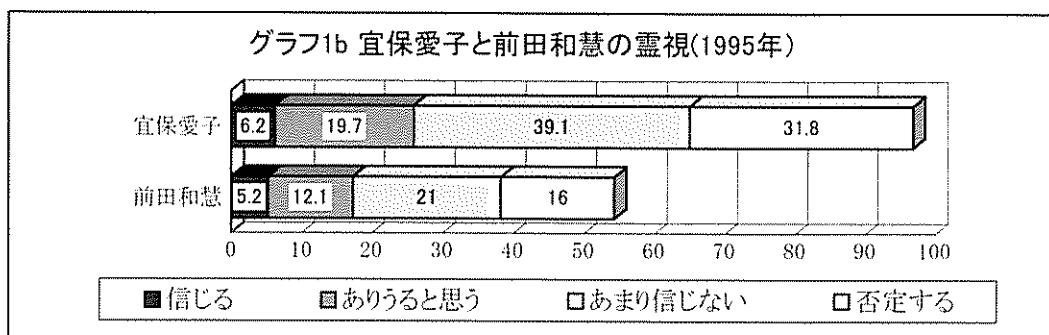


「意識調査」の結果、性別で比較すると、女性の方が靈能を信じる割合が高いことが分かった。宜保愛子の靈視についての質問では、回答の選択肢は「信じる」「ありうると思う」「あまり信じない」「否定する」、それに「その事柄を知らない」の5つあった。このうち「信じる」と「ありうると思う」を合わせたグループを肯定派、「あまり信じない」と「否定する」を合わせたグループを否定派と呼ぶことにする。そこで女性について肯定的な回答の割合がどう変化したかを調べると、92年の調査では肯定派が58.7%に達していたのが、95年

以降の「意識調査」ではしだいに数字が減少する傾向がうかがえ、99年には20.0%とちょうど2割にまで減っている。1992年と比較すると、3分の1ほどまでに減ったということである。肯定的から否定的への変化の度合いが男性よりも若干大きいということがわかる。

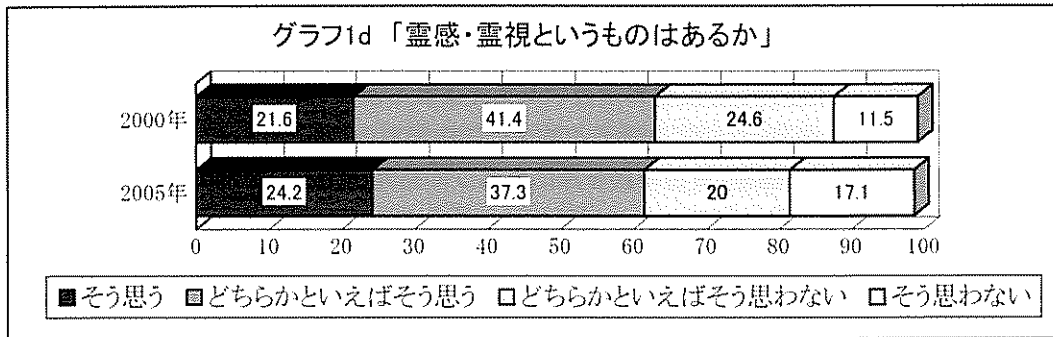
霊能者に関しては1995年に宜保愛子と並べて前田和慧の霊視についてどう思うかを質問している。当時前田和慧は、黄色い衣を身にまとって登場し、祟りの原因を霊視したりし、宜保愛子ほどではないが、何回かテレビ番組に登場していた。結果は、グラフ1bのようになった。宜保愛子の方が肯定派の絶対数が多いが、これは前田和慧は宜保愛子ほどテレビの登場回数が多くなく、知名度が低かったからと考えられる。そこで知らないと答えた人や無回答の人を除いて比較してみるとグラフ1cのようになる。これをみると大差なく、むしろ前田和慧の方が若干肯定派が多い。

性別では前田和慧に関しても、女性の方が信じる割合がいくらか高い。このように、個人名を特定したうえで、霊視の信頼度を聞くと、95年時点においては、2～3割程度が肯定派であったと推定できるのである。



2000年には霊視を行なう人物を特定せず、一般的に「靈感・霊視」を信じるかどうかを聞いたところ、肯定的な評価をする数値はだいぶ増えた。「信じる」と答えたのが21.6%、「ありうと思う」が41.4%、「あまり信じない」が24.6%、「否定する」が11.5%であった。肯定派は6割に達した。霊能者個人々人への評価という要素を取り除いてみると、こうした事柄への肯定的評価は過半数を占めることが分かった。

2005年には少し表現を変え、「靈感・霊視というものはある」かどうか質問した。「そう思う」が24.2%、「どちらかといえばそう思う」が37.3%、「どちらかといえばそう思わない」が20.0%、「そう思わない」が17.1%であった。前二者を肯定派とすると、靈感・



霊視があるという考えへの肯定派はやはり6割を超えた(グラフ1d 参照)。

1995年にはまた、インドの霊能者とされるサイババについても質問した。物質化ができる超能力者といったような紹介もなされ、指をこすり合わせるようなしぐさとともに、突然ピブティ(聖なる灰)を生じさせる場面がテレビでも何度か放映された⁽⁵⁾。

「サイババについて知っていますか」という質問では、74.5%が「はい」と答えている。男女差もほとんどなく、2%程度男性の方が多かった。当時サイババを扱ったテレビ番組はいくつか放映されており、約4分の3が知っていたことが分かる。知っていると答えた学生を対象に次のような意見を示し、それぞれに同意できるかどうかを聞いた。

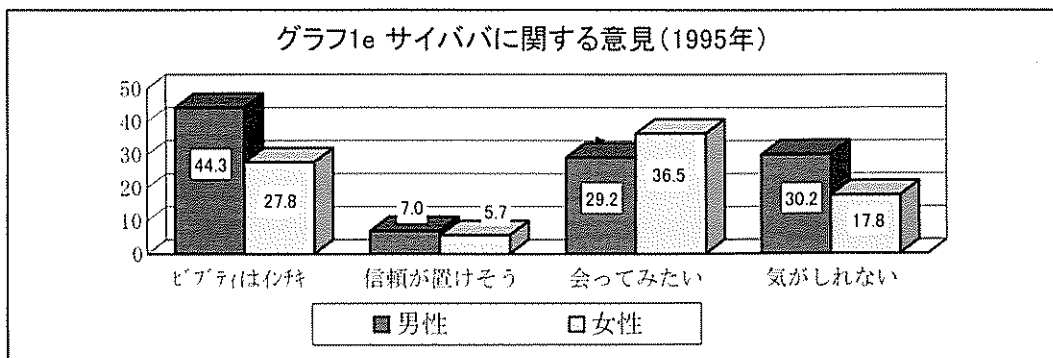
「ピブティ(聖なる灰)を出すのはインチキだ」

「信頼の置けそうな宗教家である」

「もし日本に来るなら、ぜひ会ってみたい」

「このような人物を信仰する人の気が知れない」

結果はグラフ1eに示すとおりであるが、これをみると、サイババの評価にも性別による差がみとれる。「ピブティ(聖なる灰)を出すのはインチキだ」という否定的な意見に対しては男性の方が女性の約1.6倍の多さである。「このような人物を信仰する人の気が知れない」も否定的な意見だが、これも男性が約1.7倍の多さである。「もし日本に来るなら、ぜひ会ってみたい」という肯定的な意見は女性の方が男性の1.25倍である。ただ、「信頼の置けそうな宗教家である」はいずれも低い値だが、男性が少しだけ多い。サイババについては単純に女性の方が肯定的とは言い難い面もあるのだが、全体としては男性が否定的傾向にあると言えよう。



2. 「オーラの泉」への評価

霊能者に関する関心や信頼度は一定程度あることが分かったので、2007年の調査では、江原啓之と美輪明宏が登場するテレビ朝日系の番組「オーラの泉」への関心を調べるため、3つの質問を設けた。まずこの番組の知名度を確かめるために「テレビで『オーラの泉』という番組がありますが、これについてあなたは次のどれですか。」と質問した。回答の選択肢は次のとおりである。

「いつも見ている」

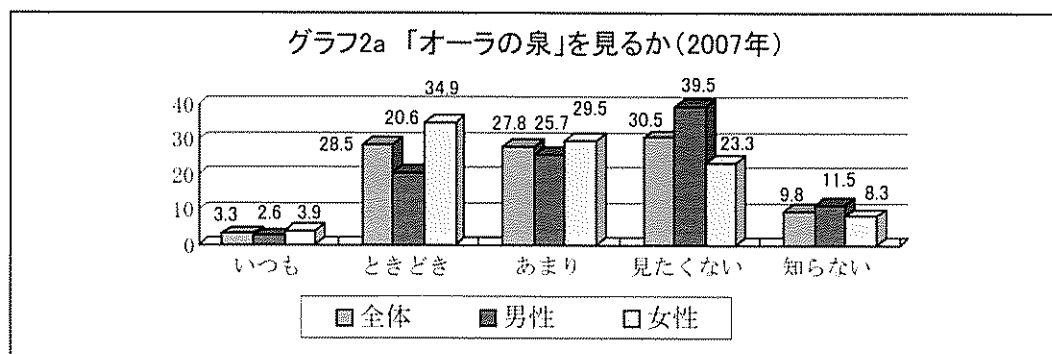
「ときどきは見る」

「あまり見ない」

「見たいと思わない」

「この番組のことは知らない」

有名な番組であるので、この番組のことを知らない人は1割しかいなかった。見ている頻度であるが、さすがに「いつも見ている」は3%少々に過ぎないが、「いつも見ている」「ときどきは見る」を合わせると、3割強になる。男女差があり、女性の方が見ている割合が高く、男性の1.6倍ほどになっている。逆に「見たいと思わない」という否定的な態度は、男性が女性の1.7倍ほどになっている(グラフ2a 参照)。



次に、「この番組では霊について語ることが多いですが、そこでの霊の話信じますか。」という形で、その番組でよく行なわれる霊視等への信頼度を探ろうとした。これについての回答では、男女差はさらに顕著になっている。「信じる」というはっきりした肯定が、女性は男性のほぼ2倍である。「どちらかといえば信じる」という割合も1.5倍近い。逆に「信じない」というはっきりとした否定的意見は男性が女性の2.2倍強となっている。肯定派と否定派の割合については、明らかな男女差がある。(グラフ2b 参照)

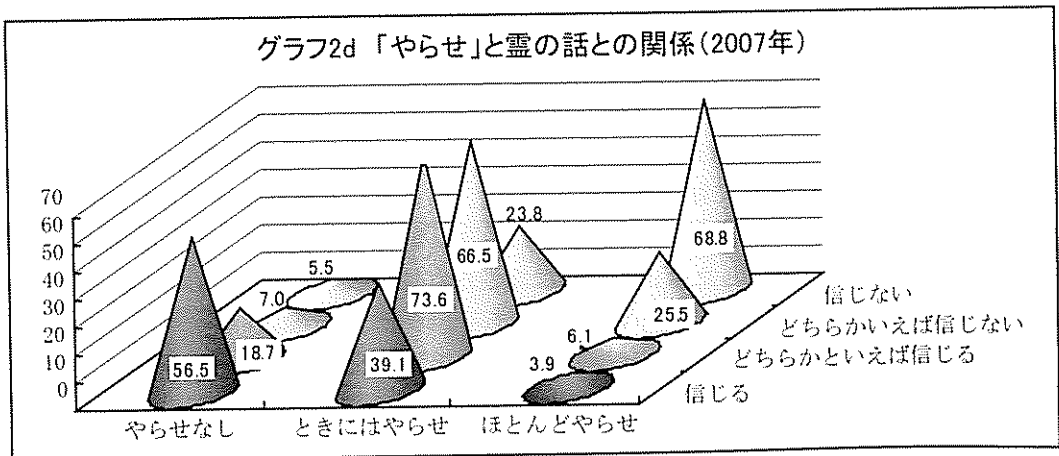
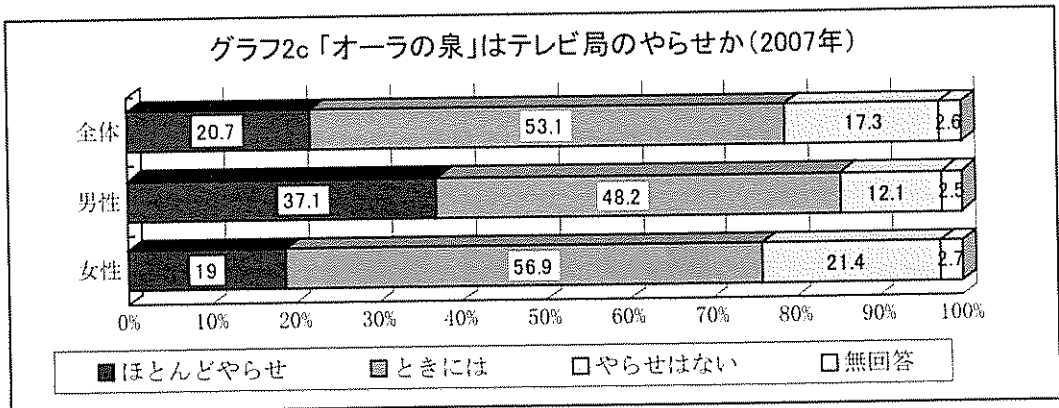
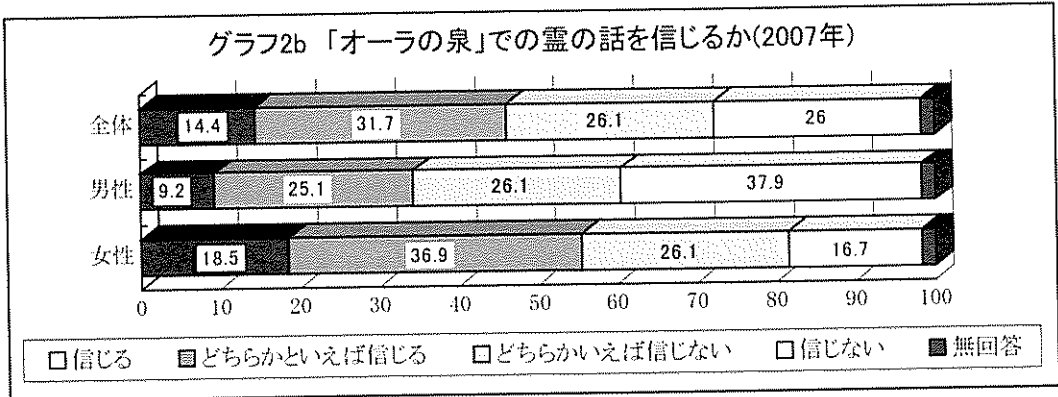
3つ目の質問は「この番組はテレビ局のやらせだと思いますか。」というもので、こうした番組についてどういう判断をしているか、直接的に質問した。これは、情報リテラシーに関わることであり、この類のテレビ番組に対しどの程度の信憑性を感じているかを知るためのものである。回答の選択肢は次のとおりである。

「ほとんどやらせである」

「ときにはやらせがある」

「やらせはない」

「ほとんどやらせである」と考えるのは、男性で37.1%、女性で19.0%と、男性が女性の2倍近い数値である。これに対し「やらせはない」は、女性が男性の1.7倍強になっている。男女とも半数程度が「ときにはやらせがある」とやや懐疑的に見ているが、明確な肯定もしくは否定の表明では男女差が著しい。(グラフ2c 参照)

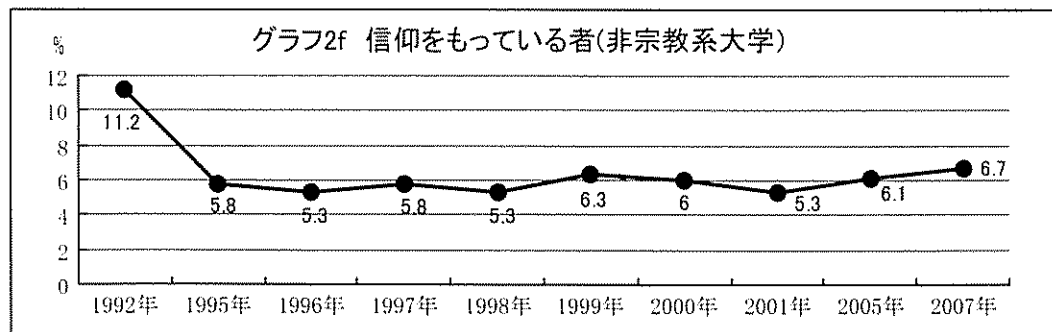
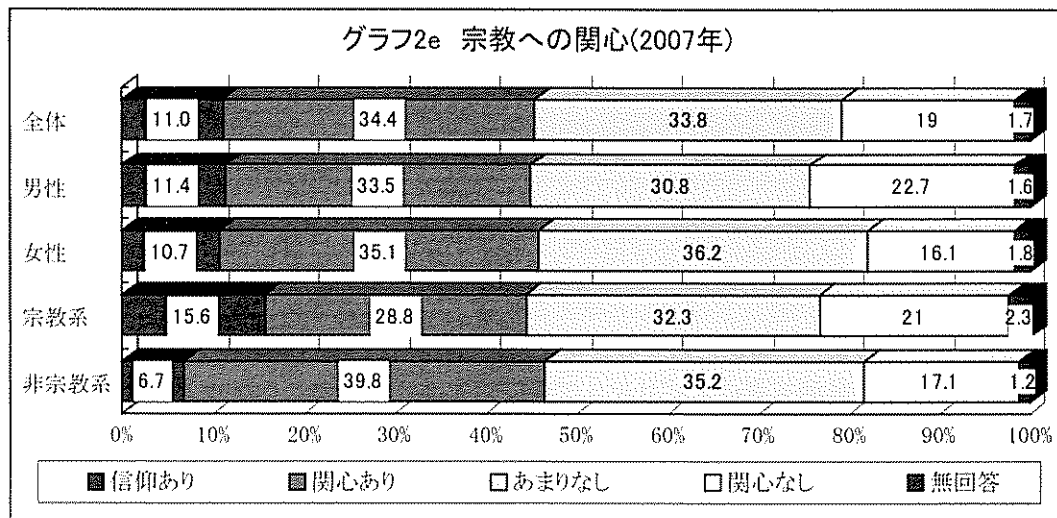


こうした番組がやらせであるかどうかと、霊の話を信じるかどうかには相関性があると考えられる。そこで2つの質問結果をクロス集計してみよう。グラフ2dに明ら

かなように、やらせがあると考えるグループは霊視を信じない傾向が強く、やらせがないと考えたグループは信じる傾向が強い。霊の話を「信じる」グループでは、「やらせはない」と答える割合が高く、56.5%に達する。そして「ほとんどやらせ」と答えるのは3.9%に過ぎない。

これに対し、霊の話を「信じない」グループでは、「やらせはない」はわずか5.5%であって、「ほとんどやらせ」と答えたのが68.8%である。「どちらかといえば信じる」「どちらかといえば信じない」というややゆるやかな肯定もしくは否定をするグループは、「ときにはやらせがある」という中間的な回答を選ぶ割合がもっとも高く、それぞれ73.6%、66.5%である。2つの質問に対する答えの相関性は明らかである。

霊の話を信じる人は信仰心もあるのだろうか。2007年の調査では信仰をもつ人の割合は、全体で11.0%、非宗教系の大学に限ると6.7%であった(グラフ2e 参照)。宗教系の学校を含めた全体での数値は、創価大学や天理大学の回答者数によってやや変動の幅が大きくなるので⁽⁶⁾、非宗教系大学だけをとりだした方が、全体の推移を推定しやすくなる。非宗教系の大学の回答者だけ信仰をもっているグループの割合をこれまでの調査結果と比較したのがグラフ2fであるが、これまでとそう大きな変化はみられないものの、2007年では微増の傾向もみてとれる。



宗教の関心の度合いについて、「意識調査」では、次の4つのグループのどれにはいるかを答えてもらっている。

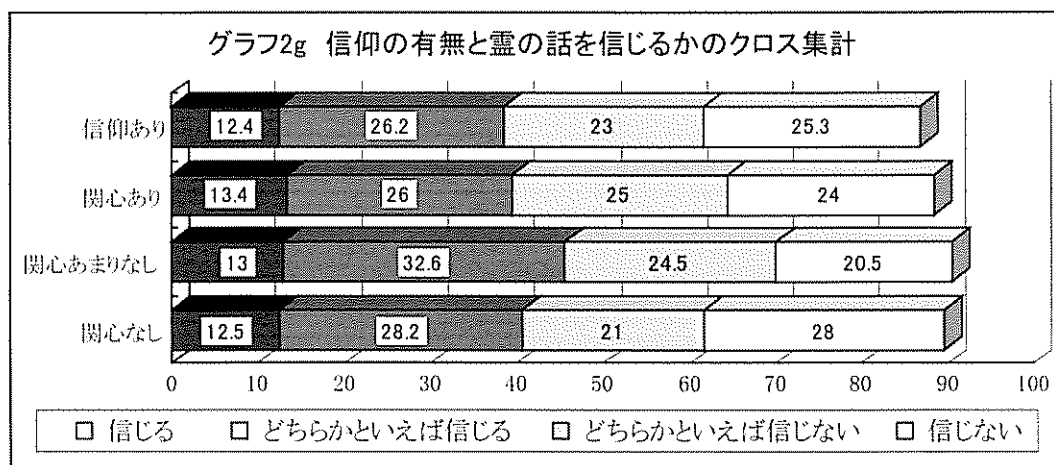
「現在、信仰をもっている」

「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」

「信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」

「信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない」

この4つのグループそれぞれと、霊の話を感じるかどうかをクロス集計したのがグラフ2gである。これを見ると、とくに強い相関関係は見えてとることができない。強いて言えば、「信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」というグループが、霊の話を「どちらかといえば信じる」という割合が若干高めである。つまり、霊を感じるかどうかは、信仰心とはあまり関係ない、さらには信仰がない方が関心が強かったりする傾向があるということである。



では「オーラの泉」の番組に対する意見と、スピリチュアルへの関心とはどういう関係になるであろうか。回答者のスピリチュアルに対する意見を調べるため、2007年の調査では『「スピリチュアルな」という表現であなたが感じるのは次のどれですか。』という質問をした。回答の選択肢として、次の5つを設けた（複数回答可）。

「精神的深みを感じる」

「近づきやすく感じる」

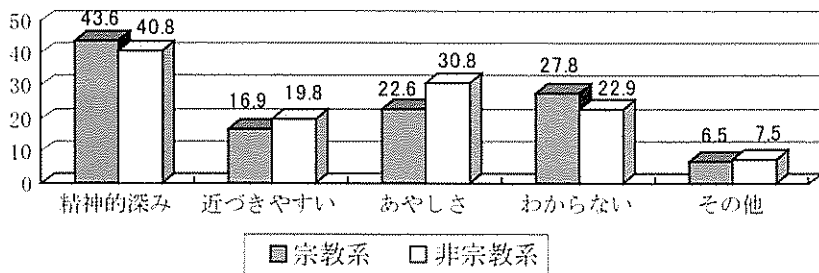
「あやしさを感じる」

「よくわからない」

「その他（具体的に）」

「その他」を選んで具体的に記述した回答者が267名いたが、そのうち江原啓之に言及したのが4分の1近くの66名であった。スピリチュアルという言葉の広まりに江原啓之の存在が大きな比重を占めていることがこれによっても明らかである⁽⁷⁾。それぞれの回答の割合を宗教系大学と非宗教系大学とを比較しながら示したのがグラフ2hである。それほど大きな差ではないし、とくに宗教系が肯定的な意見というわけでもない。ただ、宗教系の大学といっても、学生が宗教を信じていたり、関心をもっている割合が高いとは限らな

グラフ2h 「スピリチュアルな」の印象(宗教系別)



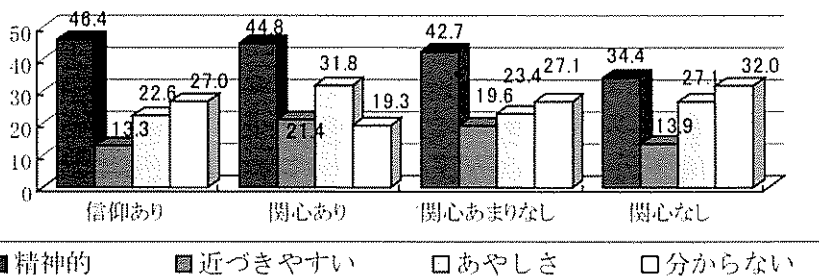
い。天理大学や創価大学などは別として、多くのキリスト教系、あるいは仏教系の大学では、宗教関連の学部を除けば、他の学生の意識は非宗教系の大学の学生とさほど変わらない。

そこで、回答者のうち、信仰をもっているグループが、スピリチュアルに関することさらに、他のグループと異なる傾向を示すかどうかを確認しておきたい。グラフ2iでわかるように、「現在、信仰をもっている」というグループは、精神的深みを感じる傾向にあるが、それほど顕著というわけではない。「現在、信仰をもっている」グループと、「信仰をもっていないし、宗教にもあまり関心がない」というグループとの差は46.4%と42.7%とあまり大きくない。

スピリチュアルに近づきやすさを感じているのは、むしろ「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」というグループであり、21.4%と最も高い数値である。信仰をもっているグループは13.3%で、宗教に関心がないグループより低い。興味深いことにあやしさを感じる割合も「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」というグループが31.8%と最も高い。また「現在、信仰をもっている」というグループでもスピリチュアルがなんであるか「分からない」と答える人が27.0%いて、他のグループと比べて中間くらいである。

信仰とスピリチュアリティの関係は、「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」というグループにおいて面白い特徴を見出せそうである。つまり、そういう人たちがスピリチュアルに精神性や親しみをもち、その反面であやしいと思う割合も最も高い。そして知らない割合は最も低い。

グラフ2i 信仰の有無とスピリチュアリティ(2007年)

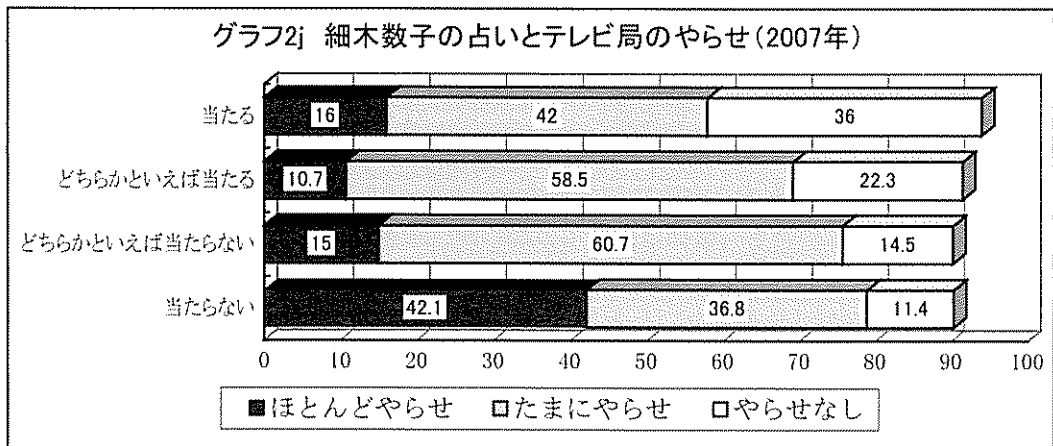


性別で比較すると、明らかに女性の方がスピリチュアルに肯定的評価をする割合が高い。逆に男性はあやしさを感じる割合が高く、女性の21.1%に対し33.8%と約1.6倍である。

次にメディアの影響を考える上で、「オーラの泉」にやらせがあると思うかどうかの回答結果を細木数子の占いへの信頼度とクロス集計してみよう。細木数子という人物自体は97.1%が知っていると回答しており、知名度は非常に高い。占い番組は霊能番組と少し性格が異なり、遊び的要素も強くなると考えられる。ただテレビ番組に受ける影響ということを考える上では両者のクロス集計もやっておいた方がいいだろう。

グラフ2jで分かるように、細木数子の占いに肯定的になれば、「やらせはない」と考える割合は高くなる傾向があることが分かる。ちなみに細木数子の占いが「当たる」と答えたグループと「当たらない」と答えたグループを比較してみよう。「ほとんどやらせ」と答えた割合は、「当たらない」グループが約2.6倍の多さとなる。逆に「やらせはない」と答えた割合は、「当たる」グループが3.1倍の多さとなる。

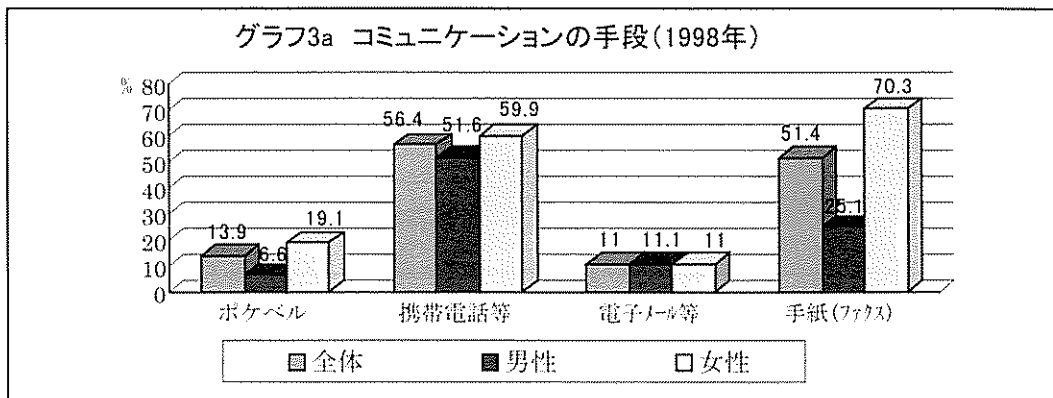
ここには占いへの信頼度と霊視への信頼度がどう関連しているかという問題と、この類のテレビ番組一般に対する信頼度という2つの問題が混在している。このクロス集計だけで、どちらの要因が強いかの判断はできないが、占いが当たっている人は、テレビ局を信頼がちで、霊視にも肯定的になる傾向があるとみなしていいだろう。



3. インターネットの影響

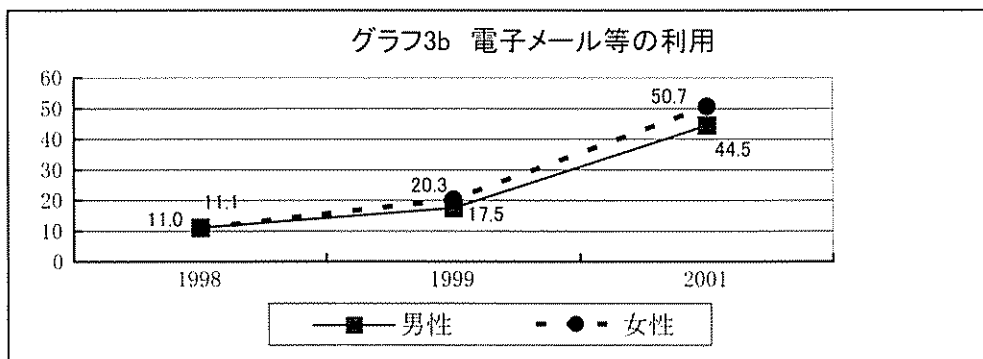
1995年からの「意識調査」において、インターネットに関わる質問項目を設けたのは、1998年の第4回調査が初めてである。このときは、「日常的なコミュニケーションの手段として、あなたが用いているもの」を問う形で、コミュニケーション手段の実情を探ろうとした。対象としたのは、ポケベル、携帯電話・PHS、電子メール・パソコン通信、手紙・ファックスであった。ちょうどポケベルが消え去りつつあり、携帯電話が急速に普及する時期であった。また電子メールは新たなコミュニケーション手段として広まりつつあった。

調査結果により、今から10年前の1998年の4、5月頃の時点では、電子メールは学生の間でもまだ1割程度の普及であったことが分かる。男女差もほとんどないが、他のコミュニケーション手段をみると、いずれも女性が男性を上回っており、女性が他者とのコミュ

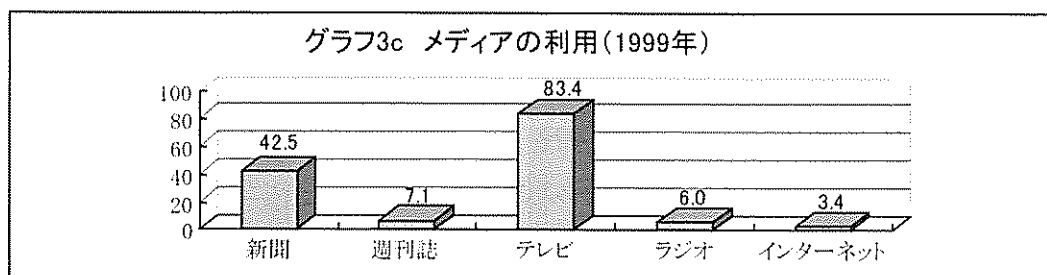


コミュニケーションに積極的であることが分かる(グラフ3a参照)。新しいコミュニケーション・ツールが出現したとき、それを使おうとする割合は、それ以前の他者とのコミュニケーションへの積極度に比例するのではないかという推測がここから生じる。

翌99年にも選択肢をやや細分化して同様の質問をしたが、その1年間で、ポケベル、携帯電話、電子メールに数字の大きな変化があった。ポケベルの使用は13.9%から1.2%へと10分の1以下に減った。携帯電話・PHSは、56.4%から76.9%へと1.4倍近い増加である。電子メール・パソコン通信は11.0%から19.1%へと1.7倍ほどの増加である。わずか1年でこれだけの変化があるということは、1998、99年前後の時期というのは、学生のコミュニケーション・ツールにも、急激な変化が生じた時期であることを物語っている。1999年の電子メール・パソコン通信の利用度を性別で比較してみると、男性17.5%、女性20.3%と女性の方が上回っている。電子メールの利用については2001年にも調査したが、女性の利用がやはり多い。(グラフ3b参照)



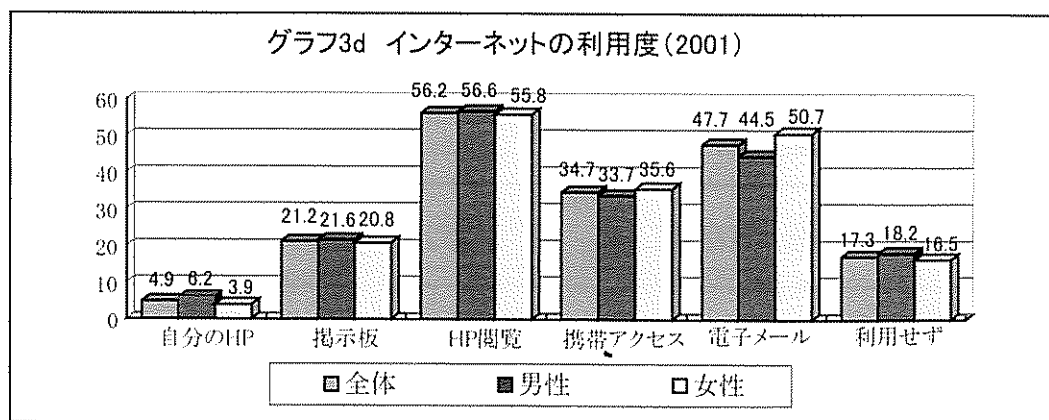
99年にはまた「日常的にニュースを知る手段として、あなたがもっとも多く用いているもの」は、何かという形でメディアへの関心度合いを質問した。回答の選択肢に用意したのは、新聞、週刊誌、テレビ、ラジオ、インターネットである。複数回答であったが、もっとも多いのはテレビで83.4%、次いで新聞の42.5%、週刊誌7.1%、ラジオ6.0%、インターネット3.4%であった。この時点では、インターネットはニュースを知る手段としては、まだラジオにも及んでいなかったことが分かる。(グラフ3c参照)



2000年の調査では、インターネット関連の質問項目は設けなかったが、2001年の第7回調査では、宗教とインターネットに関する質問項目を3つ設けた。インターネットがどんどん広まりつつある時期であったので、まずその利用内容について質問した。回答の選択肢は次の6つである(複数回答可)。

- 「自分のホームページを持っている。」
- 「掲示板への書き込みやチャットをしたりすることがある。」
- 「いろいろなホームページを閲覧する。」
- 「携帯電話・PHSからホームページにアクセスしている。」
- 「電子メールに使っている。」
- 「インターネットは利用していない。」

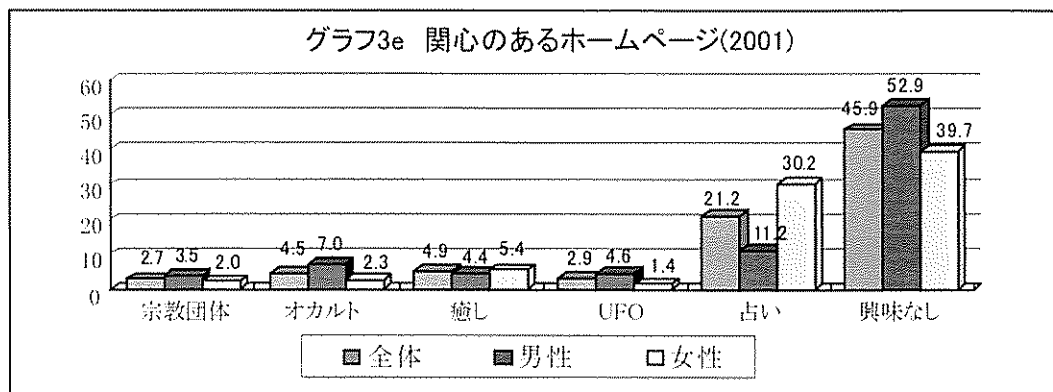
結果はグラフ3dのとおりである。自分のホームページを作成している人は5%程度であるが、ホームページ閲覧は56%と過半数に達している。また電子メールの使用は47.7%で、2年前の調査の2.5倍ほどになっている。携帯電話等からのアクセスも3分の1を超えている。自分のホームページ作成は男性が多いが、電子メールの利用は先ほど述べたように、依然女性の方が多。ホームページ作成が男性の方が多のは利用度というより、女性の方が自分の情報を公開することに当初はためらいがあったのかもしれない。ちなみにインターネットを利用しないという人は男性の方が女性より2割近く多い。



インターネットに関する2001年調査の2番目の質問は、インターネットを利用している人に対し、どのような内容のサイトを見るかについて問うたものである。回答の選択は次の6つである(複数回答可)。

- 「宗教団体のホームページ」
- 「オカルト・超常現象に関するホームページ」
- 「癒しに関するホームページ」
- 「UFOに関するホームページ」
- 「占いに関するホームページ」
- 「上の1～5のようなホームページには関心はない」

その結果はグラフ3e のようになった。宗教団体のホームページへの関心はかなり低く、3%未満である。これに対し、比較的高いのは占いのホームページへの関心で2割を越す。とくに女性の場合は3割を超える。宗教やサブカルチャー関連のサイトに関心のない人は45.9%と半数近い。



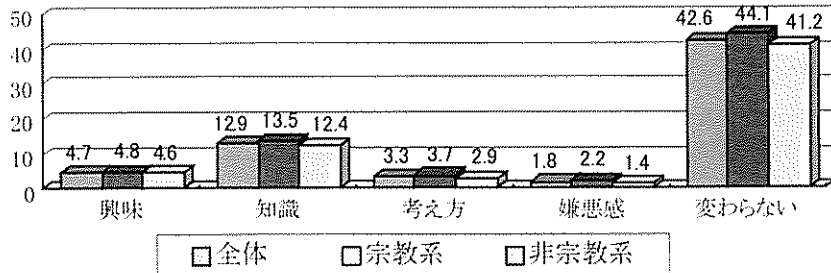
3番目の質問は「インターネットで宗教や宗教に関する情報を得たことで、あなたは次のどれになりますか。」ということで、意識の変化があったかどうかを聞いた。回答の選択肢は次の5つである(複数回答可)。

- 「宗教や宗教に関することに興味があった」
- 「宗教や宗教に関することの知識が増えた」
- 「宗教や宗教に関することについての考え方が変わった」
- 「宗教や宗教に関することに嫌悪感を抱くようになった」
- 「とくに何も変わらない」

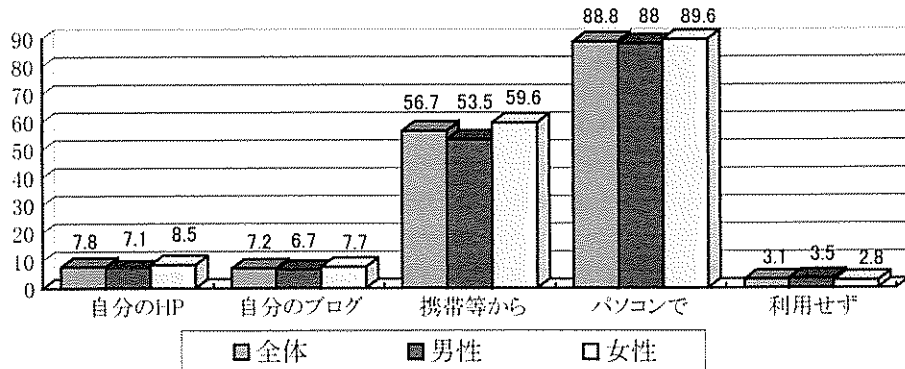
結果はグラフ3f のようになった。知識が増えたが12.9%ともっとも多いが、興味があったとか嫌悪感が増えたという肯定的面もしくは否定的面での変化はあまりなく、42.6%が変わらないと答えている。宗教に関わるホームページにもともと関心がないし、またそのようなサイトを閲覧したとしても、宗教に関する意識の変化はあまりなかったと自覚している人が多いということが分かる。

インターネット関連の質問は4年後の2005年の第8回調査でも設けた。「あなたのインターネットの利用度は次のどれですか。」という質問は同じであるが、回答の選択肢を少し変えた。ブログが広まり始めたからである。回答の選択肢は次の5つである(複数回答可)。

グラフ3f 情報を得たことによる変化(2001年)



グラフ3g インターネットの利用度(2005年)



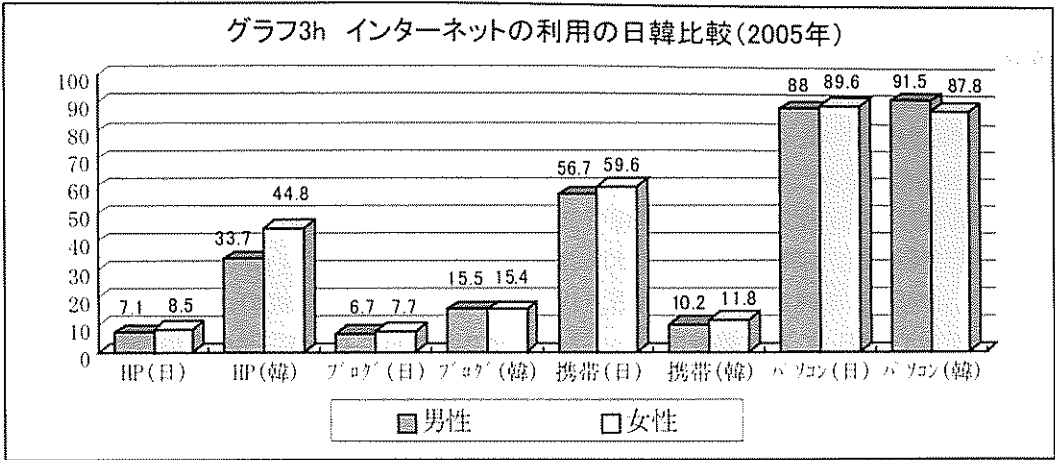
- 「自分のホームページをもっている」
- 「自分のブログをもっている」
- 「携帯電話・PHSからインターネットを利用する」
- 「パソコンでインターネットを利用する」
- 「インターネットは利用していない」

結果は、グラフ3gのようになった。2001年に比べるとホームページをもつ割合は4.9%から7.8%へと増えてはいるが、4年間を経ているにもかかわらずそれほど増加率ではない。むしろブログがホームページと同じくらいになったことが注目される。こちらの方が若い世代のニーズに合っていたと考えられる。またパソコンでインターネットを利用するのが88.8%であるのに対し、携帯電話・PHSから利用するのが56.7%にのぼっていることも注目される。インターネットを利用していない人は17.3%から3.1%へと減っている。

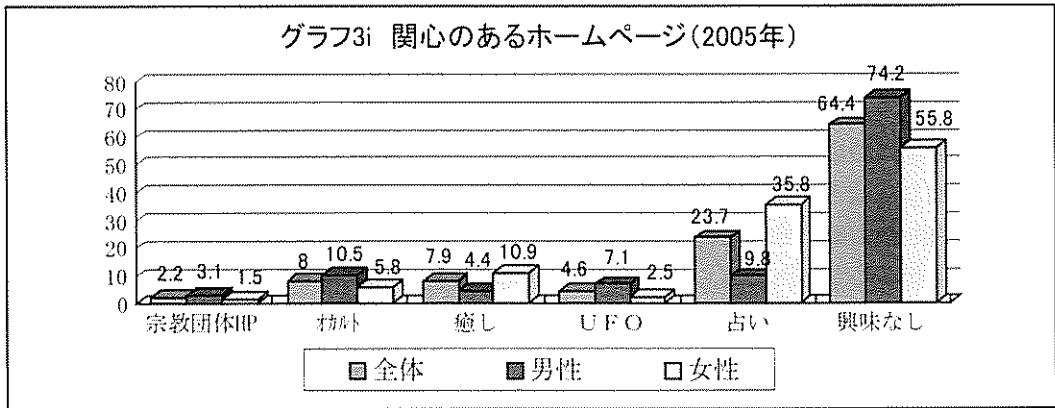
このいずれにおいても、女性の方が男性をしのいでおり、2005年になると、自分のホームページをもつ割合も女性の方が多くなっている。

この結果は韓国と比較しても面白い⁽⁸⁾。パソコンの利用については大差ないが、携帯電話からインターネットに接続するという割合は、日本の方が5倍ほど多い。しかし、ホームページをもっている割合や自分のブログを作成している割合は韓国の方がずっと多い。そして韓国ではブログをもっている割合は男女差がほとんどなかったが、自分のホームページをもっている割合は、女性が1.3倍ほど多い(グラフ3h参照)。

グラフ3h インターネットの利用の日韓比較(2005年)



グラフ3i 関心のあるホームページ(2005年)



関心をもっているホームページについても質問し、回答の選択肢は2001年に準じたが、「癒しに関するホームページ」を「癒し・スピリチュアリティに関するホームページ」と変えた。結果はグラフ3iに示した。2001年度調査と比べると、「宗教団体のホームページ」は2%台で低いままであり、「オカルト・超常現象」は4.5%から8%へとやや増えている。「癒し」は「癒し・スピリチュアリティ」としたことが関係しているかもしれないが、4.9%から7.9%へ増えている。UFOも増えているが低い数値である。占いは微増で23.7%である。注目すべきは「興味なし」が45.9%から64.4%へとだいぶ増えていることである。

2回の調査とも、宗教やサブカルチャーに関する事柄は、内容によって性別の差が、比較的明確にあらわれている。宗教団体、オカルト・超常現象、UFOについては、男性の関心が高く、癒し、占いについては女性の関心が高い。2005年の場合で見ると、オカルトは男性が2倍近く、またUFOでは3倍近く多い。他方、癒し・スピリチュアルは女性が2倍以上、占いは3倍以上多い。占いに興味をもつ女性は35.8%と、これらでは抜きん出ているので、これが「こうしたホームページには関心がない」と答えた割合が女性が少ないことに影響していると考えられる。

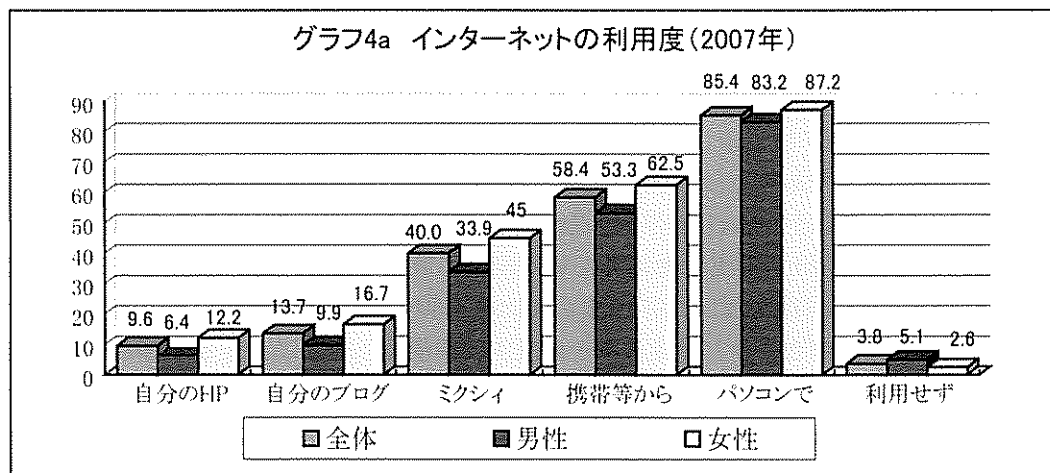
この質問に「こうしたホームページに関心がない」と答えたグループを除いて、インターネットで情報を得たことで、宗教に関するイメージが変わったかどうかを2005年に質問したが、「宗教に関していいイメージをもつようになった」人が1.8%、「宗教に関して悪

いイメージをもつようになった」人が5.0%で、後者が少し多いが、82.0%という圧倒的多数は「宗教に関してのイメージはとくに変わらない」と答えている。インターネットでの情報検索は宗教のイメージにあまり影響は与えていないが、どちらかといえば悪く作用することの方が多いいということである。

この理由はどのようなサイトをみているかまで調べないと考察できないが、ネット上における宗教関連の情報はきわめて多様であるので、そもそも理由を特定することがかなり困難と考えられる。宗教団体の公式ホームページでは、宗教についてのプラスのイメージを提供しようとしていると考えられる。しかし、こうした教団作成のホームページに関心を抱く学生は少ないことが調査で分かった。他方で批判的キャンペーンやたとえば「2ちゃんねる」に代表されるように、宗教批判があふれた掲示板もある。ネガティブキャンペーン的な情報の影響もあろう。何がもっとも影響を与えているかを調査するにしても、工夫を要すると考えられる。

4. 2007年のインターネット関連の調査

インターネット上の宗教情報に関連した質問は2007年にもおこなった。インターネットの利用形態についてはすでに述べた2001年度、2005年度の調査内容に準じたが、ミクシィの急速な広まりを考慮してこれを回答の選択肢に加えた。2005年と比べて、ホームページをもつ割合は、7.8%から9.6%に増えたが、ブログは7.2%から13.7%となり、ホームページより多くなった。さらにミクシィは40.0%と、短期間で急速に普及したことが注目される。パソコン、携帯電話等からのインターネット利用はさほど変わっていない。また利用していないという人も3%台を保っている。(グラフ4a 参照)

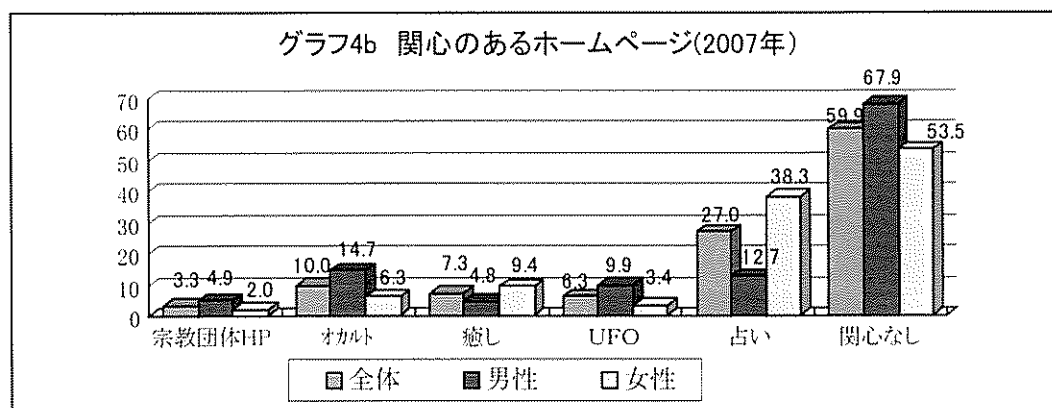


若い世代におけるインターネットの利用形態については、一般的な傾向がこれである程度つかめる。ホームページから、ブログへ、そしてミクシィに代表されるSNS(ソーシャルネットワークワーキングシステム)へと、若い世代のインターネットを用いたコミュニケーション手段は短期間のうちに、どんどん変貌している。これは宗教社会学的な現代宗教研究にとっては見逃すことのできない局面である。ミクシィはホームページやブログに比べると

閉ざされたネット空間になっている。どのような内容の情報が交わされるか分かりにくい。こうしたネットを利用したコミュニケーションが、同じ関心をもつグループごとに閉ざされていく傾向もうかがえる。ミクシィを場に、どのような宗教的な話題が展開されることになるかを広く知る有効な手段は容易には見つかるまいが、ミクシィの影響力自体は無視すべきではないだろう。

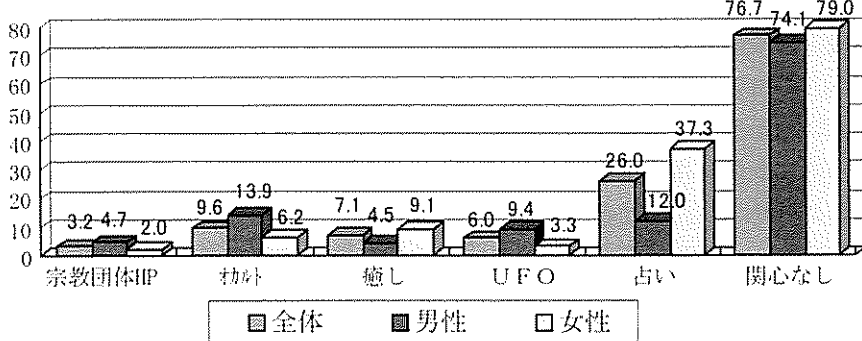
インターネットの利用度合いについては、2007年度の調査では男女差がいつそう大きくなったことが分かる。自分のホームページを作成している割合は、女性が男性の2倍近くになっているし、ブログもミクシィも明らかに女性が多い。逆に利用していない割合は男性が女性のほぼ2倍である。

2001年、2005年の調査をふまえて、2007年にも関心のあるホームページについて調べた。選択肢(複数回答可)は2005年に準じたが、「癒し・スピリチュアリティに関するホームページ」を「癒し・スピリチュアルに関するホームページ」に変えた。結果をみると、「宗教団体のホームページ」をみる人は微増だが、3%台と基本的に低い数値で変動している。「オカルト・超常現象に関するホームページ」はやや増え10%となった。「癒し・スピリチュアルに関するホームページ」はほぼ同じで、「UFOに関するホームページ」と「占いに関するホームページ」は微増である。これらのホームページに関心なしと答えた人は若干減った。宗教団体、オカルト・超常現象、UFOには男性が関心を示し、癒し・スピリチュアル、占いには女性に関心を示すという傾向は前2回の調査とまったく同じである(グラフ4b参照)。



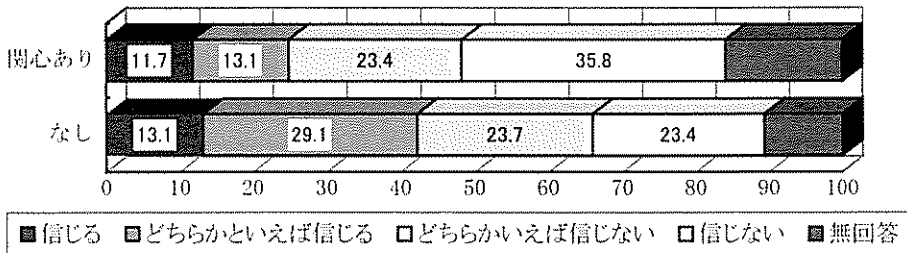
関心のあるホームページに関しては、2007年の韓国における第4回調査でも質問しているのので、日韓比較をしてみる。興味深いのは、性別による差がほぼ共通していることである。宗教団体のホームページ、オカルト・超常現象、UFO関連のホームページへの関心は、日韓ともに男性が顕著に高い。ただし、宗教団体のホームページは絶対数自体が両国とももっとも低い。逆に癒し・スピリチュアル、及び占いのホームページは、日韓とも女性の関心が顕著に高い。占いのサイトに関しては、日韓とも女性が男性の約3倍という差がある。これらのホームページには関心がないというグループの割合は、韓国の方が高いが、これはいわゆるサブカルチャー的なサイトへの関心が日本の方が少し高いからと考えられる(グラフ4c参照)。

グラフ4c 関心のあるホームページ(韓国、2007年)

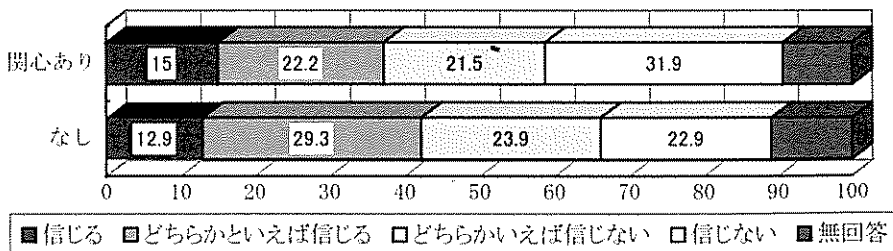


さきほど、「オーラの泉」の番組で語られる霊の話の信じる割合はかなり高かったことを示したが、では、テレビの霊能番組への関心とインターネット上の宗教・サブカルチャー関連のサイトへの関心とはどのような関係があるだろうか。関心をもつホームページとして、回答の選択肢に掲げた上記の6つの項目のチェックした人が、「オーラの泉」の番組で語られる霊の話をどの程度信じているか、それぞれの項目ごとにクロス集計してみる。結果はグラフ4d～4jに示したが、これで明らかのように、霊の話の信じる割合ともっとも関連があるのは、「癒し・スピリチュアルに関するホームページ」に関心をもっていると答えた人たちである。このホームページに「関心ある」と答えた人が霊の話の信じる割合は、「関心ない」と答えた人の約3倍である。逆に「関心ない」グループが霊の話の信じていない割合は、「関心ある」グループの4倍近い。つまり、この2つの項目の相関関係はかなり高いということである。

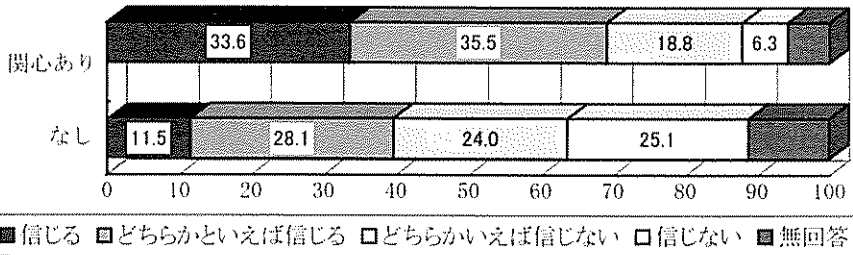
グラフ4d 宗教団体への関心と霊の話の信じる程度(2007年)



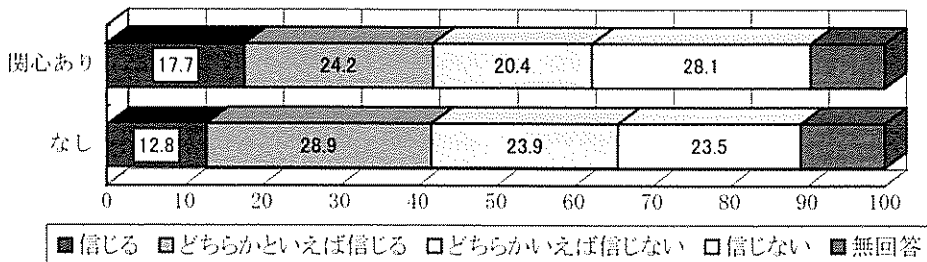
グラフ4e オカルト・超常現象への関心と霊の話の信じる程度



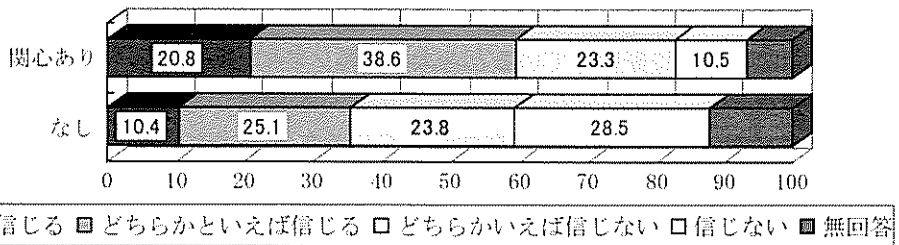
グラフ4f スピリチュアルの関心と霊の話を信じる程度



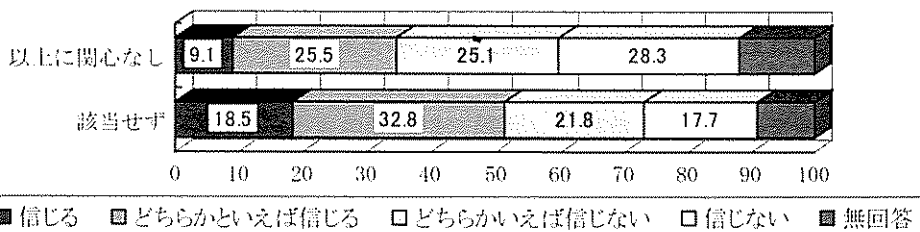
グラフ4g UFOへの関心と霊の話を信じる程度

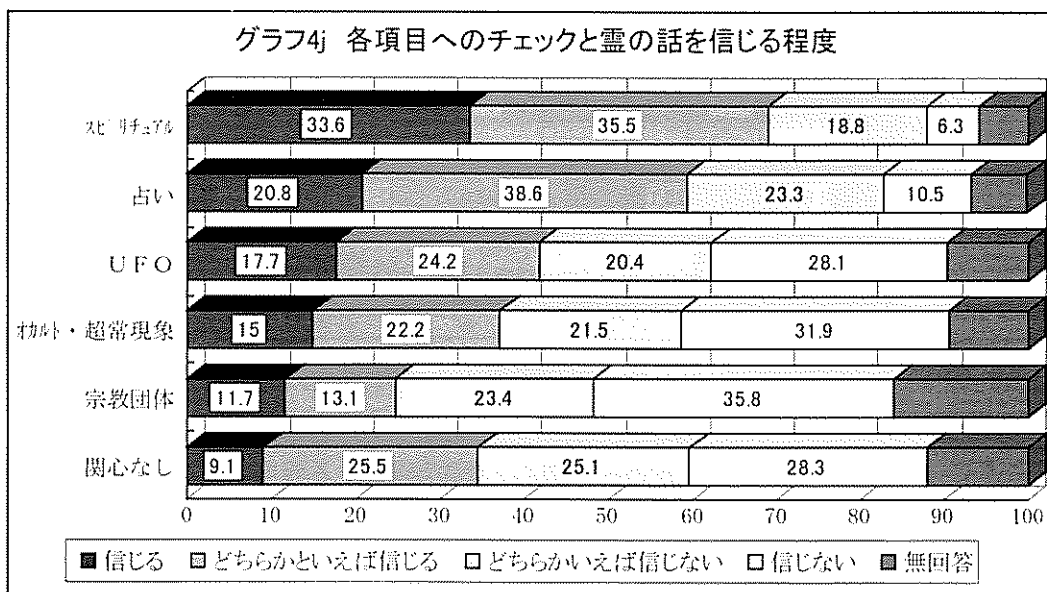


グラフ4h 占いへの関心と霊の話を信じる程度



グラフ4i 以上に関心がないと霊の話を信じる程度



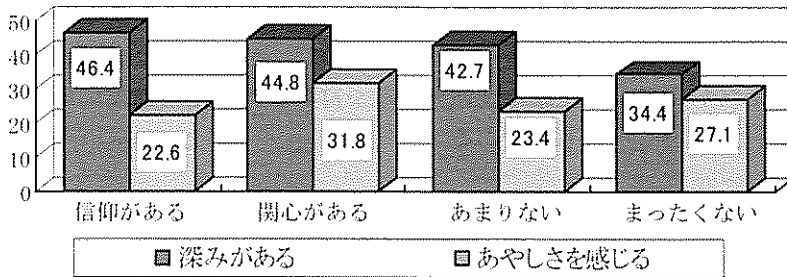


霊の話を信じることと占いへの関心とではいくらか関連性が見て取れるが、オカルト・超常現象への関心とではそれほど関連性がない。UFOへの関心とはほとんど関連性がない。また興味深いことに、宗教団体のホームページへの関心と霊の話への関心は、逆の相関がある。またこれら5つのホームページに関心がないと答えた者と霊の話とも逆の相関関係になるが、以上の結果からすると、これは当然のこととなる。

この結果は、性別による違いと関わりがあることに気づく。つまり女性が関心が高いのが癒し・スピリチュアルと占いである。また霊の話を信じる割合も女性が高い。男性はUFOやオカルト・超常現象に関心があり、霊の話は女性ほど信じない。そうした傾向がここにおける相関の結果に影響していると考えられる。

信仰の有無とスピリチュアルはそもそもどのような関係があるのだろうか。宗教への関心のあり方については、毎回同じ質問をしていることを述べたが、2007年度は宗教系で15.6%、非宗教系で6.7%が現在信仰をもっていると答えた。信仰をもっていない人はさらに宗教に関心があるかどうかで3つのグループに分けられているが、これらとスピリチュアルへの態度とはどう関係しているだろうか。宗教への関心で分けた4つのグループを、スピリチュアルについて「深みがある」と肯定的に答えた割合と「あやしさを感じる」と否定的に答えた割合がどうなるかを調べてみる。結果はグラフ4kのようになった。信仰がある人は若干スピリチュアルを肯定的にとらえる傾向があるが、きわだっているわけではない。また信仰がある人は否定的にとらえる割合がやや少ないが、これもそう顕著ではない。信仰はもっていないが、宗教には関心があるという人では、関心がない人より「怪しさを感じる」という人が多く、若い世代が宗教とスピリチュアルをそれぞれどう見ているかは、単純ではなさそうである。

グラフ4k 信仰の有無とスピリチュアルへの評価(2007年)



5. 宗教情報リテラシーについて

若い世代は広い意味での宗教情報を、家庭や学校よりも、テレビ番組やインターネットから多く得ている場合が少なくないと考えられる。ではますます広く摂取されるようになっていくウェブ上の情報については、どのような信頼性を抱いているのであろうか。それを探る一つの試みとして、2007年の調査で、この時期急速に利用が増えてきたウィキペディア(Wikipedia、ウェブ上の無料百科事典)について質問した。ウィキペディアの日本語版は2001年に作られ始めたが、2～3年でその存在が広く知られるようになった。ウィキペディアについて、次のような設問をし、あてはまるものを選んでもらった(複数回答可)。

「ウィキペディアの記事は正確なものが多いと思う」

「レポートの作成などに、ウィキペディアの記事をそのままダウンロードして使ったことがある」

「ウィキペディアに自分も書きこんだことがある」

「誰が書いたか分からないので、あまり信用しない」

「ウィキペディアが何であるか知らない」

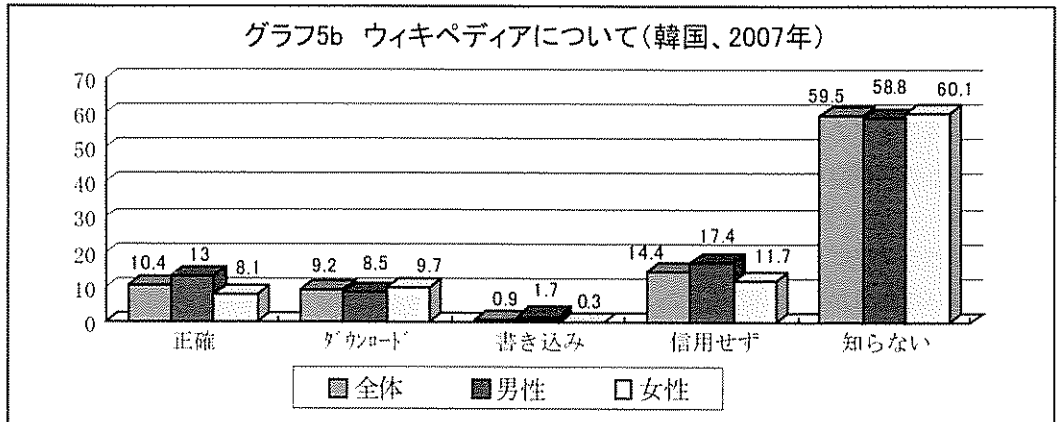
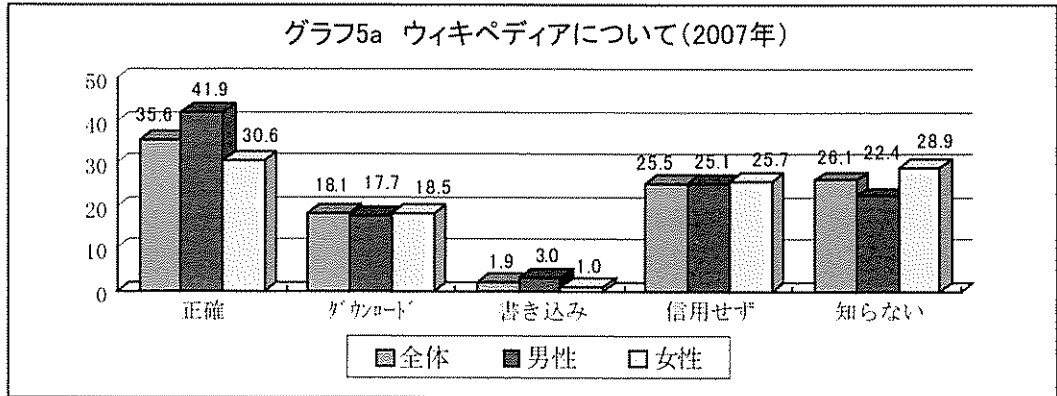
結果はグラフ5aに示した。これをみると、学生たちの3分の1以上がウィキペディアは正確だと考えていることが分かる。「知らない」と答えた人を除くと、知っている人の5割近くが正確であると考えていることになる。

性別による差について少し触れると、正確だと思っている割合は、男性が41.9%、女性が30.6%と1.3倍以上の開きがあり、男性の方が信頼している。また書き込みの経験は2%弱と少ないが、性別では男性が女性の3倍になる。ダウンロードしてレポートなどに使った割合や、ウィキペディアを信用しないという割合はあまり差がない。ウィキペディアのことを知らないという割合は若干女性が多い。

これも韓国と比較してみると、ウィキペディアに関しては日本の学生の方が利用していることがわかる。ウィキペディア自体を知らないという学生が韓国では約6割いて、日本の2倍以上である。また知っている人の中では、信用しないという回答の割合が韓国の方が高い(グラフ5b参照)。インターネットの利用度は韓国の方が広がっているので、この違いは韓国のウィキペディアの内容にも関わる可能性が高い。つまり、ウィキペディアに関しては、日本の方が質量的に充実しているという背景があり、それが関係していると考え

えられるのである。

日本の学生の間では、ウィキペディアの利用は2005年以降、急速に増えているが、これはレポート作成、その他に利用できそうだと感じた学生が増えたことも一因と考えられる。ただ、ウィキペディアは玉石混淆と言われるように、非常に有用な情報があると同時に、きわめて偏向していたり、不正確な情報も少なくない。たえず書き換えられるので、信憑性には留保を付けておくべきものである。



ウィキペディアの情報が正確であるという基準がどの程度厳密なものかは、人それぞれであることは言うまでもないが、ウィキペディアをダウンロードしてそのまま使う割合が増えている現状を考えると、学生の日常生活における情報リテラシーを考える必要性は増しているといえる。宗教情報については、宗教に関する知識は一般的に乏しいと言えるので、その必要性はいつそう高いということになる。

ところで、インターネット上の情報とは別に、若い世代の多くが実際に体験する路上での勧誘に対しては、どういう反応をしているのだろうか。2007年の調査では、路上での宗教や占いの勧誘の経験について、次のように質問した。

路上で、見知らぬ人から「手相をみせてください」、「あなたには特別なオーラがあります」などと宗教や占いに関係するような内容で声をかけられたことがありますか。

この質問に対し、そうした経験があると答えた人には、さらに次のようなサブクエスチョ

ンを設けた。

声をかけられ、「あなたに悪い霊がついているのが見えます」などと言われたら気にしますか。このサブクエスチョンに対する回答の選択肢は次のとおりである。

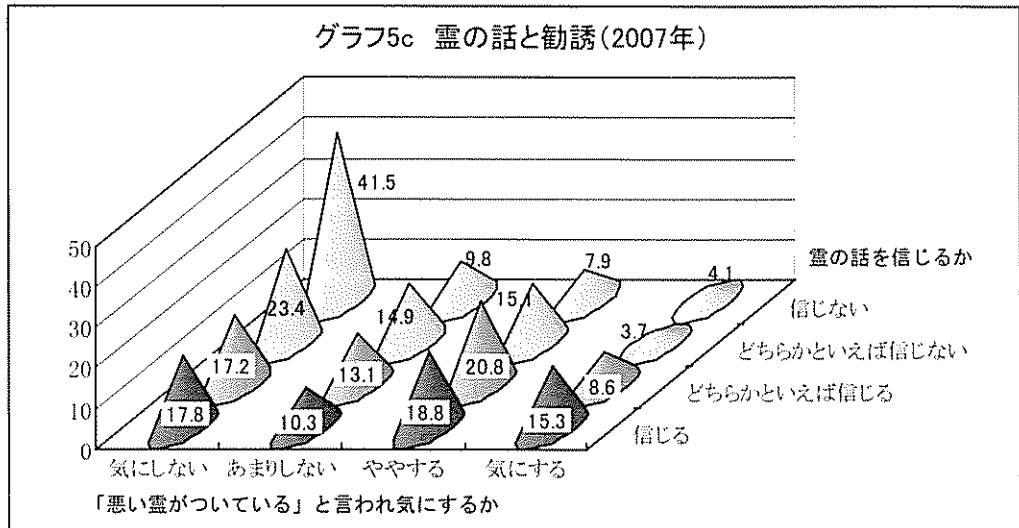
「気にする」

「どちらかといえば気にする」

「どちらかといえば気にしない」

「気にしない」

「悪い霊がついているのが見えます」などと言われ、それを気にするかどうかは、霊能番組への反応と相関関係があるものであろうか。先に示した「オーラの泉」の番組で語られる霊の話を知る割合と、この結果とをクロス集計したのがグラフ5cである。無回答については図示していない。これを見ると、両者には多少の相関がみてとれそうである。とくに霊の話を知りたくないグループは「悪い霊がついているのが見えます」などと言われても気にしない傾向がはっきりしている。霊の話を知りたくないと答えた人のうち、41.5%は、街頭で「悪い霊がついている」などといわれても、気にしないと答え、気にすると答えた4.1%の10倍になる。他方、霊能番組の霊の話を知るグループは他のグループに比較して、見知らぬ人から言われたこうした言葉でも気にする割合が若干高い。



このような結果は、それぞれの学生がもともと霊の存在をどう思っているかによると説明することもできる。それゆえテレビの番組がこの傾向にながしかの影響を与えているとただちに結論づけるわけにもいかない。

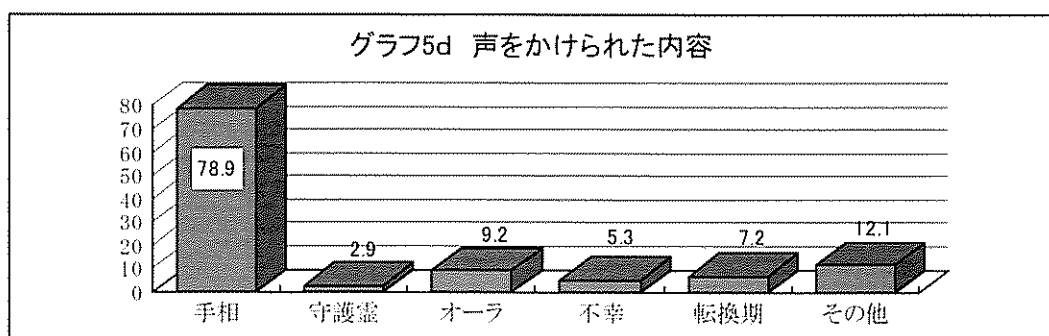
この設問では、実際に声をかけられた経験をもつ人には、どのような内容の話であったかについても聞いている。声をかける内容として、次のような内容が多いことが学生の間では知られているので、選択肢を示した上で、それ以外については自由記述してもらう形にした。

「手相の勉強をしています」

「あなたの守護霊が見えます」

- 「あなたには特別のオーラを感じます」
- 「このままだと何か不幸なことにあいます」
- 「今、人生の転換期です」
- 「その他(具体的に)」

結果をみると、グラフ5dに示したように、飛びぬけて多いのは「手相の勉強をしています」で78.9%にのぼった。ついで、「あなたには特別のオーラを感じます」9.2%、「今、人生の転換期です」7.2%、「このままだと何か不幸なことにあいます」5.3%、「あなたの守護霊が見えます」2.9%の順であった⁽⁹⁾。このうち、オーラ、守護霊というのは、霊能番組でもしばしば用いられる用語である。宗教というより、むしろサブカルチャーにおいて多用される概念である。テレビの霊能番組の語りと、サブカルチャー的な語りは非常につながりが深く、テレビ番組がこれらを肯定的に扱えば、若者への影響はいくらかでも及ぶことは十分可能性がある。



テレビの霊能番組が情報時代においてどのような影響を与えているのかを実証的に調べるのはなかなか困難であるが、それがどうあれ、他方で宗教情報リテラシーを高めるための宗教文化教育を広く行なっていくことの意義については議論を重ねる必要がある。学生たち自身も、宗教文化教育に対してはそれなりの必要性を考えていることが2007年の調査では明らかになった。

2007年の調査では、次のような意見について、それぞれ「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」から選んでもらった。

「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」

「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」

「道徳の授業をもっと充実させた方がいい」

「いのちの大切さを教える授業を充実させた方がいい」

「学校では受験や就職に必要な知識や技能を教えるだけでいい」

回答の選択肢を肯定的な回答が多い順に並べて示したのがグラフ5eである。いのちの大切さを教える教育に肯定的な回答がもっとも多かったが、次いで世界の宗教文化についての基礎的知識を学んだ方がいいを選んだ人が多かった。宗教文化を学ぶことには「そう思う」が4割を越え、「どちらかといえばそう思う」を加えた肯定派は8割ほどである。いのちの教育については、宗教系の学校の回答者にやや肯定派が多かったが、宗教文化の教育については、非宗教系の学校の回答者の方に肯定派がやや多い。ただいずれもそう大きな違

いではない。

なお道徳の授業の肯定派も6割を越した。愛国心を深める教育は3分の1強が肯定派である。学校教育は知識・技能のみでいいという意見の肯定派は1割ほどである。

宗教についての知識を深めるための教育を、学生たちが必要と考えるかどうかに関しては、1996年以降、類似の質問を何回かしている。その問いかけの内容は次のとおりである。

「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」(1996～1999年)

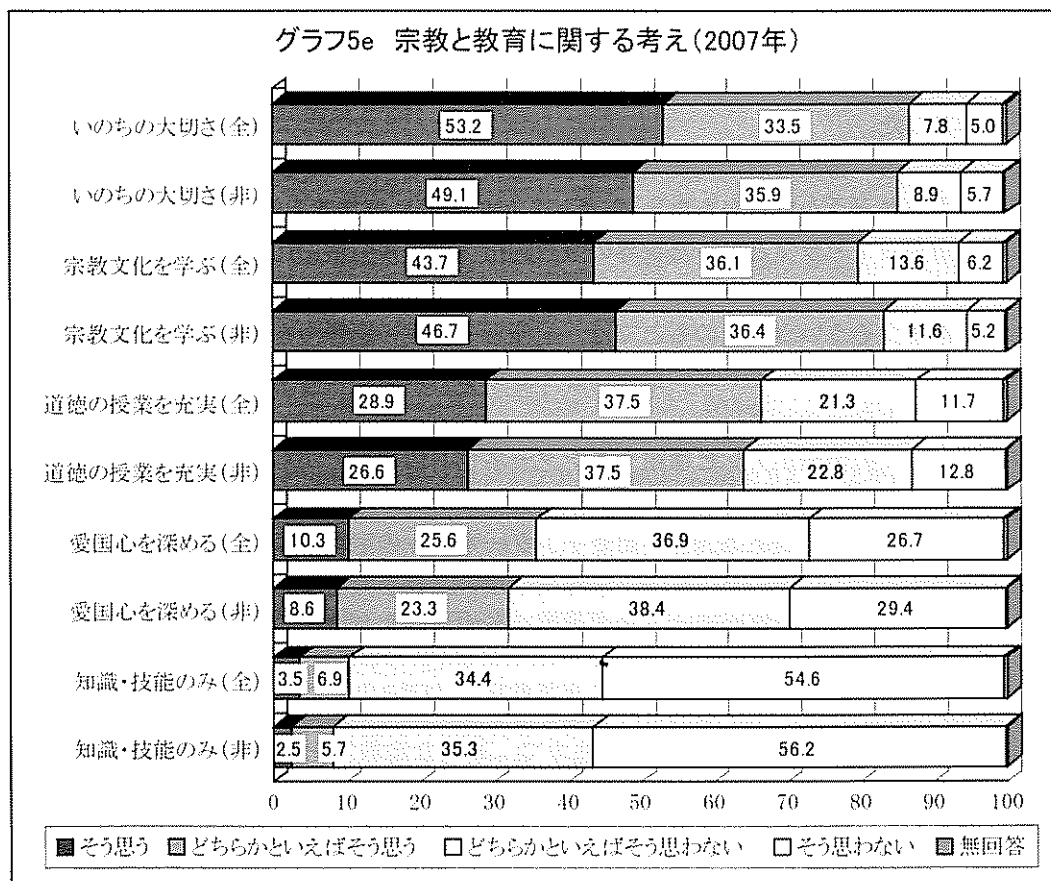
「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」(2005年)

「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」(2007年)

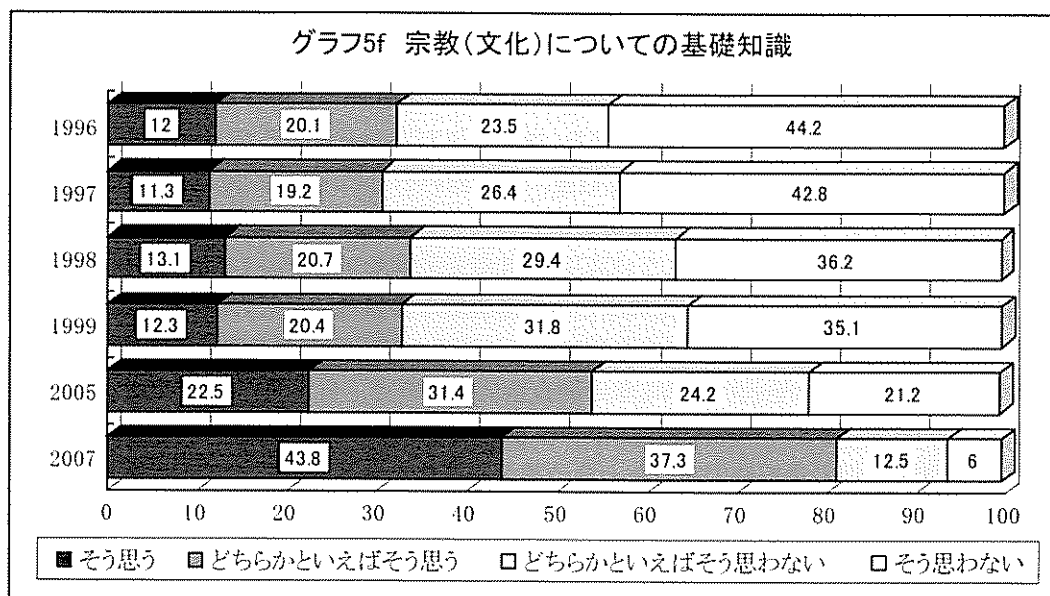
質問の内容が少しずつ変化したのであるが、それに応じて、肯定派の割合がしだいに増加している。すなわち1999年と2005年の調査を比較すると、肯定派が1.6倍ほど増えており、また2005年と2007年の調査を比較すると、肯定派が1.5倍近く増えている。1996年から1999年まで同じ選択肢であったときの数値の変化から推定して、学生の意識が1999年以降大きく変わったとは考えにくく、この変化には選択肢の変化が関わっていると解釈する方が適切であろう。

「宗教」というよりは「世界の宗教」、そしてさらに「世界の宗教文化」という教育により適切さを感じているという可能性が高いということである。

もっとも「教えるべきだ」から「学んだ方がいい」とゆるやかな表現にしたことも関係していると考えねばならない。



グラフ5f 宗教(文化)についての基礎知識



むすび

以上、2007年度に実施した宗教意識調査を中心に、それ以前の一連の調査結果を参考にしながら、霊能番組の影響、インターネットの宗教情報の影響について分析した。その上でそれらが宗教情報リテラシーを考える上で、どのような問題を投げかけているかについても言及した。

霊能番組、占い番組は娯楽的要素も強く、ただちにそれが若い世代の宗教理解に大きな影響を与えるかどうかは分からない。ただテレビに頻繁に登場する霊能者の知名度は、ローマ教皇とかダライ・ラマといった世界の宗教的指導者の知名度に比べてもずっと高い。まして日本の宗教家などはもっと知名度は低い。メディアに登場する頻度が比べ物にならないからである。そういう状況のもとでは、霊能者の発言の影響力を度外視することはできない。他方、インターネット上の情報は必ずしも宗教についてのイメージを好転させるものではないことも分かった。

宗教についての情報がテレビ番組やインターネット情報などから得られる割合は、今後いっそう増えていくことが予測される。宗教情報リテラシーという発想を研究・教育上に導入する必要性がここにある。テレビやインターネットの宗教情報の大半は、体系的な思考や一定の宗教史の知識の上に基づく情報ではないことを考慮すると、体系的な知識を基盤とした宗教文化教育の重要性は、情報化が進行すればするほど、増していくと考えられる。

宗教について「アブナイ」という評価をする学生が過半数を占めることは、「意識調査」でも明らかになったことであるが⁽¹⁰⁾、他方で、適切な宗教文化教育に対しては、肯定的な評価が大半を占めることも分かった。現代社会において広い意味での宗教情報が、若い世代にどのように発信され、受信されていくようになるのか。その実態と変容についての実証的な研究を積み重ねていくことが、今後の宗教情報リテラシーについての教育を考え

る上で、欠かせない作業となる。

注

- (1) 2007年度の調査は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「宗教教育における情報リテラシーの日韓比較」(研究代表者・井上順孝)の研究メンバー(磯岡哲也、岩井洋、黒崎浩行、佐々木裕子、田島忠篤、平藤喜久子)が中心となり、「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトのメンバー、その他の方々の協力を得て、2007年4月～6月に実施された。全国35の大学から4,306名の有効回答が得られた。協力をいただいたのは、市川誠、市田雅崇、稲場圭信、薄井篤子、遠藤潤、檜尾直樹、葛西賢太、川橋範子、木戸口靖之、黒木雅子、古賀和則、小島伸之、櫻井義秀、佐藤直実、白井聡子、関口茂久、武田道生、永井美紀子、中野毅、西村明、深澤英隆、カール・ベッカー、三土修平、宮本要太郎、村上興匡、本林靖久、八木橋伸浩、矢野秀武、山中弘、吉田永宏の各氏である。

また同年9月～11月には、韓国における調査を実施し、12の大学から1,385名の有効回答が得られた。韓国での調査に際しては、ソウル大学の金鐘瑞氏、西江大学のキム・ジェヨン氏、朴奎泰氏、成均館大学の林泰弘氏、東国大学の呉錫崙氏、泉千春氏、大邱カトリック大学の朴承吉氏、東西大学の南椿模氏、その他の方々の協力を得た。データの入力と集計に関しては、國學院大學大学院生の金子香奈里さん、玉置麻衣さんにお手伝いいただいた。韓国語の調査票作成及び韓国語による回答分の日本語訳は、同じく國學院大學大学院生の李和珍さんに依頼した。これまで実施した調査の報告書、その他の情報については、下記のホームページに掲載されている。

<http://www.kt.rim.or.jp/~n-inoue/index.files/jasrs.htm>

- (2) 第1回～9回のアンケート調査の実施校数と有効回答数は下記のとおりである。

年度	実施校数	有効回答数
1995	32	3,773
1996	42	4,344
1997	41	5,718
1998	43	6,248
1999	73	10,941
2000	42	6,483
2001	38	5,769
2005	32	4,252
2007	35	4,306

- (3) 日本文化研究所における宗教教育プロジェクトは1990年に開始され、12年にわたって実施された。大きく二期に分かれ、1990年から1995年までの最初の6年は「宗教と教育に関する調査研究」というプロジェクト名で、主として国内の宗教系の学校調査、アンケート調査、資料収集を行なった。第一期の研究成果は、國學院大學日本文化研究所編・井上順孝監修『宗教教育資料集』(すずき出版、1993年)と、國學院大學日本文化研究所編・井上順孝責任編集『宗教と教育』(弘文堂、1997年)等に示されている。

1996年から2001年までの6年は、「宗教教育の国際比較」というプロジェクト名で、日韓比較を中心にしながら、国外の宗教教育を視野に入れた調査・研究を実施した。その成果は国際宗教研究所編・井上順孝責任編集『教育のなかの宗教』(新書館、1998年)などに示されている。

- (4) 1992年の宜保愛子の霊視に関する調査では回答の選択肢の文言が少し異なる。これが多少は影響している可能性があるため、対比させて示しておく。ただ、前二項は肯定的な表現

であり、後二項は否定的であるので、肯定派、否定派の変化には1992年の結果を参照できると考える。

1995年以降の選択肢	1992年の選択肢
「信じている」	「基本的に信じている」
「ありうると思う」	「信じているわけではないが、ありうることだとは思っている」
「あまり信じない」	「どちらかといえば、疑わしいと思っている」
「否定する」	「信じていない」

- (5) 東京大学で理学博士を取得したという肩書きを有する青山圭秀が、1993年に『理性のゆらぎ』、また翌年『アガステアの葉』、『真実のサイババ』と立て続けにサイババ紹介の本を出版したことが日本でサイババブームが起こった一因とされている。しかし、オウム真理教による地下鉄サリン事件以降、サイババを霊能者として扱う番組もなくなっていった。それだけでなく、なにもないところから突然物を出現させる、「物質化」と呼ばれる現象もトリックであるという批判的視点からの番組も放映されるようになった。
- (6) 宗教系の大学でもとくに創価大学、天理大学の回答者は信仰をもつ割合が高い。キリスト教系大学や仏教系大学の多くでは、非宗教系大学とさほど変わらない。宗教系の大学の間でのこうした違いを具体的に数値によって示した例として、磯岡哲也「大学生の宗教意識—宗教教育に関するアンケート調査の分析から(二)」(『國學院大學日本文化研究所紀要73』、1994年)がある。
- (7) スピリチュアルで連想することで、江原啓之の名をあげたもののうち、何割かは「江原さん」という表記をしている。親しみのこもった表現といえる。他方で否定的なイメージもいくつかあった。たとえば、「うさんくさい」「商業的イメージ」「インチキな感じがする」「金もうけ」「サギまがい」「馬鹿馬鹿しい」「アホっぽい」「妄想家」等々である。
- (8) 2005年における韓国での調査は10の大学から1,243名の有効回答が得られている。
- (9) その他の具体例と記載されたものを一部紹介する。
- 「以前事故にあったことはありませんか？」
「水晶玉に興味はありませんか？」
「貴方は今の人生に満足していますか？」
「神のありがたいお言葉を聞きませんか？」
「あなたキレイな目をしてますね」
「あなたのご先祖のことでお話があります。」
「人の運には波があります。幸運の波をもっと上げたいと思いませんか？」
「血を浄化します」
「あなたのためにお祈りさせてください。」
- (10) 「意識調査」の結果については、それぞれの回の報告書があるが、2005年までの調査結果を比較してまとめたものとして、井上順孝『若者における変わる宗教意識と変わらぬ宗教意識』(國學院大學、2006年)がある。同書にも示したが、1998年、1999年、2000年の3回の調査とも、「宗教をアブナイ」と思う学生は、だいたい3分の2ほどを占める。

付記 本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「宗教教育における情報リテラシーの日韓比較」(研究代表者・井上順孝)による研究成果の一部である。